



ワンタイムスリーブ

act1: 「キャンディ」

「探さなきゃ。」

「何を探すの？」とわたしが尋ねると

「次の恋人」と、切れ長の一重をこちらに向けて、絢子は言った。

そういえば、絢子は恋人が途切れたことがないね。わたしが冗談交じりに笑うと

「戻りたくないから」と腰まである髪の毛を細いゴムで束ねながら言う。

過去になにかあったの？と言うと、絢子は

そうね、と言葉を濁らせた。

入学式で、意気投合して、ルームシェアをはじめた大学1年生の夏から、4年の今まで、絢子は美しい恋人を連れてきた。最初はどきどきしたけれど、新しい恋人がやってくるたびに、どんな人を連れてくるのかを想像するのが密かな楽しみになっていたほどだった。

どの男の子も、顔がしゅるんと整っていて、足が長く、凛々しいカモシカのようなようだった。

どの男の子も「絢子がお世話になっています」と礼儀正しく挨拶をしていた。

それぞれが、ほんとうに絢子のことを愛しているように見えた。

その横で、にこにこしている絢子は、どこか上の空で誰も愛していないように見えた。

そんな絢子が、いつになく、焦っている。

最後の恋人、裕司さんと別れてから2週間、絢子のまわりには男の子の影がなかった。

1日、1日過ぎていくにつれて絢子は焦り始めた。手先の爪が伸び、気のせいか、猫背になっていることが多くなった。ここ最近では、お皿を2枚も割った。

「はるなはいいな、人間で。」

意味深で、でもそれがきれいな嘘には聞こえなくて

わたしは、少しだけ怖くなった

「綾子も人間じゃん」

「今は」

「今は、ってこれからもでしょ。さっきからどうしたの？最近、おかしいよ」

「これから先もずーっと恋できるの。それは素敵だわ」

「絢子だってできるでしょ。今までだってそうじゃない」

「もう、むずかしいのかも。そんな気がしているのよ」

ふう、と深いため息の後、しばらく無音になり
ただじっと、次の言葉を待っていたけれど
それを遮るかのように

呼び鈴が鳴った。

その一瞬前まで、夢を見ていたかのような絢子の言葉が、急に現実に戻った。

「宅急便だわ」

すくり、と立ち上がって、綾子は深いため息をつき
そのまま表へ出て行ったまま、戻らなかった。

わたしはずっと帰りを待っていたけれど、もう戻ってこないような気がして、
でもどこかで綾子は生きてると、奇妙な確信を持ちながら、日々は過ぎていった。

絢子がいなくなってから1年後の
夏のある日、智と素麺を食べていたら

「絢子がいなくなったっていうのに、はるなは呑気だな」と唐突に切り出された。
「そんなことはないよ、ただ」

「あの後、絢子がどうなったのか、知りたいって思わないの？」

「え」

どうしたの。
なんで智が知っているの。

そうたずねても、智は無言のまま、ただ黙って素麺を食べ続けた。

どうして教えてくれないの。
どうして。

わたしは、泣き出した。

絢子のその後を知るのが怖かったのと、急に話を切り出されて不意打ちだったこと、思い出が溢れ出て、ゆらゆらと立ち上って来たこと、すべてに。

泣き続けるわたしを見て、前から決めていたかのように
今から散歩に行こう。と、智が言った。

行きたくない、そんな気分じゃない。と、抵抗するわたしを見ないフリして、
智は、散歩の準備を始める。

散歩だと言ったのに、手にしたボストンバックは大きかった。

電車で揺られたまま、わたしは行き先も教えてくれない智に子どものように、ただくっついていき、ときどき二言三言、続かない会話を繰り返した。
あげる、と差し出されて、もらったキャンディーはポケットにしまったまま、わたしは何も食べなかった。目的地に向かう今の瞬間が、夢であったほしいと思ったから。

最終電車を乗り継いで、たどりついたのは、小さなみずうみだった。

日がおちはじめて、薄暗い誰もいない校庭のような静けさが辺りを包んでそこに、ひとり照らされたように光る、絢子がいた。

「ひさしぶり」
みずうみの畔を、優雅に泳ぐ人魚は、絢子だった。

「みずうみはどう？きれいでしょ、とても」
「...うん」

「あれから突然、いなくなってしまうてごめんなさい」
「知らせたら、きっと、はるなはここに何回も来ると思ったから」

実はね、と言って智を絢子は見た。

「彼に知らせていたの、ずっと前から」
「前から...？」

隣で、ただじっと絢子を見つめる智が頷いた。

「そうよね、兄さん」

「え」

「ああ」

「智さんは、わたしのお兄さんなのよ、はるな」

みずうみの水を飲み干してしまったかのような感覚におそわれて、急にわたしは立ちすくんでしまった。

「隠していてごめん。俺は絢子の兄なんだ」

「智も尾ひれがあるの？」

動転したわたしが唐突な質問をしたから、絢子も智も笑い始めた。

「それは後で話すよ」

それからしばらくして、絢子はわたしに説明してくれた。

人魚は、1ヶ月だけ人間になれる薬を持っていて、それを飲み干すと人間の姿になれること。

ただし、人間でいる間は恋人をしなければならないこと。

一度、別れてから3週間以内にまた新しい恋人ができれば、その薬はつづくこと。

そのかわり、人魚としての命は短くなっていくこと。

わたしは、その話を聞いて切なくなった。

その説明を紙に書いて、くしゃくしゃにまるめてみたくなった。

「絢子は、いつも、だれかが隣に居たけれど、ほんとうにだれかを愛せていたの？」

すこし、間をおいてから

「愛していたけれど、愛せなかった」

絢子の本音と願望が一緒になって、打ち消されるように、みずうみの中へ消えていった。

わん、と音が鳴って

智がわたしの手を握った。

現実であることを、ただ強く証明するように。

「そろそろ、帰ろう」

「だめ、もう少し居たい」

「もう、帰らなきゃ。戻れなくなるよ」

絢子はただじっと、何も言わずに表情を変えずに

わたしを見つめて

「来てくれて、ありがとう。もう、会えないと思うけれど...

私は人間のときに、はるなと出会えてよかった。

たぶん、人間でいたいと思ったのは、はるなみたいな女の子に、憧れていたのがあったから。」

「絢子、わたしは」

「さようなら」

伝えようとしていたことが、ぽろぽろと崩れて、その際に絢子はみずうみへ深く潜り、そのまま

見えなくなった。

「だいすきだった」

絢子にでもなく、智にでもなく、わたしにでもなく、ただ、みずうみにそう告げた。

帰り道、智の手を握りながら、ポケットに入れたままのキャンディの存在に気づく。
もう、夢じゃないから大丈夫だよね、と口に運んだキャンディは
少しだけ、しょっぱかった。

